南北朝期における律宗義について(下)

——附・清算撰『靈峰記』後半部分(二)翻刻——

大谷由香

筆者は『仏教学研究』第六十四号掲載の「南北朝期における律宗義について」(以下、前々稿と略)にて、清算(一二八八~一三六二)の著作である『靈峰記』の前半部分を翻刻紹介し、南北朝期の律宗義が天台の戒解釈に近似していたことを明らかにし、また同第六十六号掲載の「南北朝期における律宗義について(中)」(以下、前稿と略)で、清算が律宗義の核として護持しようとした五点のうち、三点のみを紹介し、該当する『靈峰記』後半の一部を翻刻した。本稿は、前稿に書き漏らした残る二点について述べている。すなわち前稿と本稿とは、元来一体のものであり、清算がどのような点を律宗義の核として考えていたのかを理解していただくために、前稿と合わせて通覧していただければ幸甚である。

清算の著作『靈峰記』では、前半部分に「受戒即成仏」や、「法華経受持即持戒」などと言ったことが主張されており、一見して律宗義が天台義と全く同じものに変容したように見受けられるが、後半部分では「次に以前所述の一家の深義、台宗と同異の事条々(龍谷大学図書館所蔵書写年代不明本(以下『龍大本』と略)、二五丁表。筆者加点。傍線や記号、括弧内挿入がある場合、筆者による挿入である。また文字は内容等からみて、異本

のものに置き換えてある場合がある。以下の引文も同様)」とあり、ここに清算がどのような教義を律宗義の要諦としてとらえていたのかを見ることができる。

『霊峰記』には、九条の律・天台両義の同異が述べられているが、これらを精査して、両者の異なる点に注目すると、①律蔵の取り扱いの相違、②三学の考え方の相違、③三聚浄戒と相即するとされる法数の名目順序の相違、④戒体の一得不捨の考え方の相違、⑤受戒によって得る悟りの種類の相違、の五点に集約することができる。本稿ではこのうち④⑤の二点について述べ、前稿と合わせて、清算当時の律宗義が、如何なる点において独自性を主張したものであったかを明らかにすることを目的とする。また、その前提として、清算の『霊峰記』撰述の意趣と、彼が天台義の典拠として用いる『果海鈔』についても私見を述べたい。なお、拙稿の典拠として、『霊峰記』の該当部分の翻刻を附録する。

一・清算による『霊峰記』撰述の意趣

まず、清算の『霊峰記』撰述意図について説明したい。

『霊峰記』が律宗義を学ぶ初学者のために律宗義の特色を記したものであり、またその特色の一々が、天台義にかなり接近したものであったことは、前々稿で述べた。清算は『霊峰記』最後部分に、これら一連の義を、妄りに宣伝せず、頓機の人を選んで相伝するよう求めている。

一巻之条々、非二普通之説一。固可レ秘二外聞一。莫レ説二此経一高祖之訓説、莫二妄宣伝一霊師之誡併、在レ之。

(果)海抄云。但此秘要、全為二頓機一、全非二漸機一。(後略)(『龍大本』六七丁裏)

持戒の必要を無視するとも取られかねない円戒義が、すでに天台では僧侶の堕落に直結する状態となっていたこ

ともあり、そうした誤解を避けたい清算の思いが、『靈峰記』最後部分に表されているとも考えられるが、そうした誤解を受ける恐れを抱きながらも、敢えて『靈峰記』を撰述した意図について、清算は以下のように説明している。

A凡此私抄之由来者、以二六一相伝之果海鈔一、為二本質一記レ之。B彼果海鈔者、戒光寺相伝秘蔵之書、為二台宗上代之先徳、尽二円頓妙戒之深義一記録也。明師相伝云。従二大唐神堯皇帝一以来、於二終南高祖之戒家一門之宗義観道一者、超二先代之諸祖一。反光二九代一之謂、頗依レ之。然而高祖之釈義、意趣幽邃、能詮太簡略。C爰靈師本習二台宗一改レ跡入二終南一家。於二仏祖之本懐一、頗有二所領一。依レ之比二交終南天台之宗旨一、窮二同異之両途一。（中略）入二釈文一能々可レ思レ之。D先哲迷二此両途一、或全同二台宗一、或偏異二彼宗一。E是以開二彼海抄一、知二同異之両相一。取レ同成二一家之扶佐一、捨レ異止二一家之相濫一。戒光所レ秘、専依二此意趣一。今此私抄、亦同二彼意趣一。思レ之思レ之。（『龍大本』六六丁裏～六七丁表）

この文からは、清算が『靈峰記』を記した延文二（一三五七）年当時、律宗旨と天台宗旨との同異の境が不明瞭になっており、律宗義は、天台の戒理解と全く同じであると主張する者がいたり、また反対に天台の戒理解とは全く異なっていると主張する者がいたりという状況になっていたことがわかる（D先哲、此の両途に迷い、或いは全く台宗に同じ、或いは偏えに彼の宗に異なれりと）。こうした両宗義混同の背景の一つとして、清算は南山宗復興の祖である元照の教学変遷を挙げている（C爰に靈師、本台宗を習い、跡に改めて終南一家に入る。仏祖の本懐に於いて頗る所領あり。之に依りて終南天台の宗旨を比交し、同異の両途を窮む）。清算によれば、元照はもと天台宗の人師であって、後に南山律宗に転向したとされており[1]、彼自身は天台と南山とを照らし合わせてその同異を深く理解していたのであるが、後の者はこの元照の解釈をよく理解していないために、先に述べたように律宗旨と天台宗旨との同異を誤認しているのだという。こうした状況を打破して、律・天台両宗の同異を

明らかにし、同ずるところにおいては、律宗義を理解するための助けとし、異なるところにおいては、これを捨てて天台義との混同を避けるということが、清算の目指すところであり、『靈峰記』著述の意趣であったという。

二・『靈峰記』に引用される『果海鈔』について

(A) 伝持

清算が『靈峰記』を著すにあたって、大いに参考にしているのが『果海鈔』である(A)凡そ此の私抄の由来は、一相伝の果海鈔を以て、本質を為さんと之を記すものなり)。清算は、『靈峰記』後半部分で天台義と律宗義との同異を明らかにしていくのであるが、その際『果海鈔』をかなり長く引用して天台義を紹介し、その後に律宗としての自身の見解を述べる方法を採っている。

この『果海鈔』は、天台宗上代の先徳が、自宗の円頓妙戒の深義を尽くさんと記録したものであり、一山室生寺[2]に相伝され、後に戒光寺に秘蔵されていた書物であるという(B)彼の果海鈔は、戒光寺相伝の秘蔵の書にして、台宗上代の先徳、円頓妙戒の深義を尽くさんが為に記録するものなり)。律寺である戒光寺に、天台の「円頓妙戒の深義」が書かれた『果海鈔』が秘蔵されていたことについて、清算は、天台の義を正確に知ることで律宗と天台宗の同異を明らかにするためであると述べている(E)是れを以て彼の海抄を開き、同異の両相を知り、同を取りて一家の扶佐と成し、異を捨てて一家の相濫を止めん。戒光に秘する所は、専ら此の意趣に依る)。

室生寺は、興福寺僧である賢璟(七一四~七九三)とその弟子修円(七七一~八三五)によって創建されており、その後空海の高弟真泰(生没年未詳)など興福寺有縁の僧が入山してきたことから、一般に法相と真言とを宗とする寺院であると考えられている。しかし仲尾俊博氏の研究によれば、初代天台座主である修禅大師義真

(七八一～八三三)から一度は座主位が授けられた円修(?～八一四～八四四～?)が、これを認めない最澄直系の弟子たちによって承和元(八三四)年に職を差し止められて、室生寺に入山しており、さらに円修が入唐して『大唐国日本国付法血脈図記』を持ち帰ることで、天台の血脈の正統を室生寺に持ち込み、「室生天台」の法流を創設したとされておられる[3]から、これにしたがえば室生寺に「台宗上代の先徳、円頓妙戒の深義を尽くさんが為に記録するなり」とされる『果海鈔』が伝わっていたことに矛盾はない。

また堀池春峰氏によれば、空智房忍空が、乾元初(一三〇二)年頃に室生寺に入り、乾元二(一三〇三)年に室生寺金堂である薬師堂で伝法灌頂を行い、さらに延慶元(一三〇八)年十月には灌頂堂を創建したことが明らかで[4]、忍空は、これらの事跡から『招提千歳記』巻中之二では「室生寺中興忍空律師」と紹介されている(『大日本仏教全書』巻一〇五、三五八頁上)。この忍空なる人物は、『円照上人行状』などで、円照門下として名前が並べられており、室生寺の他にも戒壇院・竹林寺・勝鬘院などにも住した律僧であったことが、各種伝記から明らかである。ことに『本朝高僧伝』巻第六十一では「京兆戒光寺沙門忍空」と紹介されていて(『大日本仏教全書』巻一〇三、三一四頁上)、忍空が現在泉涌寺の末寺となっている戒光寺の僧でもあったことが記されており[5]、こうしたことから、室生寺が中興される延慶元年頃には、室生寺と戒光寺との間には人的な交流があったことが推測できる。すなわち清算が『果海鈔』を「一一相伝」であり「戒光寺相伝秘蔵の書」と解説していることには、以上のようなことが背景としてあるものと推測でき、清算が『霊峰記』を著した延文二(一三五七)年当時には、室生寺と戒光寺の間に書物の移動がみられたと考えられる。

さらに松尾剛次氏が翻刻研究された『西大寺末寺帳』[6]によれば、極楽寺所蔵の『西大寺末寺帳』(書写年代不明)には、長老が西大寺から直接任命される直末寺として、戒光寺の名が挙がっているようである。清算は文保元(一三一七)年に、室生寺で『分物古式　南都北京』を書写するなど、室生寺と縁をもっていたことが知られ、

さらに西大寺末寺である不懐化身院を有する大覚寺にて『霊峰記』を著作しており、[17] 同時期か、直後に西大寺長老を勤めることとなったから、西大寺を中継して戒光寺へ出入りすることもあったのではないか。ともかく、以上のような寺院の関係があった上で、清算は『果海鈔』を被閲する機会を得たものと考えられる。

(B) 叙述の特長

『霊峰記』に引用されている『果海鈔』は、基本的に問答体を採っており、「天台意」として、智顗説灌頂記『摩訶止観』『法華玄義』、智顗述『四教義』、湛然述『摩訶止観輔行伝弘決』『法華玄義釈籤』、安然『普通授菩薩戒広釈』などを主に引用する。

時たま「他宗釈」として一行『大毘盧遮那成仏経疏』や元照『四分律刪補随機羯磨疏済縁記』(以下『済縁記』と略)』が引用されることから、『果海鈔』の筆者が「他宗」として真言宗と南山宗を想定していたものと理解できるが、『済縁記』は天台宗の義を補強する意味で使用されている箇所もあり、扱いが曖昧である。これは清算が述べていたように、元照がもと天台宗の人師であったと理解されていたこともあったのかもしれないし、また俊芿によって律文献が大量に宋から持ち込まれた後、天台宗内で『済縁記』なども研究されたためであったかもしれない。

『果海鈔』そのものの成立時代は判定しかねるが、『済縁記』を叙述した元照の生没年が一〇四八～一一一六年であるから、早くとも一一一六年前後の成立であることは確実である。

三・律宗義と天台義の相違点

前稿に重複するが、『霊峰記』後半部分の目次を、今一度確認しておきたい。

[『霊峰記』後半部分目次（再掲）]

次以前所述一家之深義、台宗同異之事条々（『龍大本』二五丁表）

（A）彼宗之意、三聚浄戒通二四教一事〈付一家同異〉（『龍大本』二五丁裏）

（B）彼宗以二仏性一、為二円頓之戒躰一事〈付一家同異〉（『龍大本』三〇丁表）

（C）彼宗頓大之妙戒、全以二法華一為レ躰事〈付一家同異〉（『龍大本』三一丁表）

（D）彼宗以二法華事理修行一、全為二円戒之随行一事〈付一家同異〉（『龍大本』三三丁表）

（E）彼宗円極之妙戒、受随二躰妙観相応、戒観一致談レ之事〈付一家同異〉（『龍大本』三四丁裏）

（F）彼宗三聚即三仏性即三道之宗義事〈付一家同異〉（『龍大本』四〇丁裏）

（G）彼宗円極妙戒一得不失之事〈付一家同異〉（『龍大本』四七丁裏）

（H）彼宗之円戒名二果分戒一、又受戒時六即成仏事〈付一家同異〉（『龍大本』五九丁表）

（I）彼宗円頓妙戒之行人、果海修行之相事〈付一家同異〉（『龍大本』六四丁裏）

前稿でも述べた通り、以上の九条は全て天台義で主張されている事柄であり、同様に律宗義でも全く認められているとされる事柄である。清算によれば、両者の相違はこれら九条を認めるにいたる前提の教学にあるとされて

おり、それらを確認していくと、前述の通りの五項目に集約される。前稿にて、そのうちの前三項目については説明したので、ここでは残る二項目について述べたい。

(四) 戒体の一得不捨について

天台宗では、元来衆生が有している仏性妙理を戒体とするため、戒は一度受ければ、決して失うことはないと主張される。その根拠となるのが、『梵網経』の「一戒光明、金剛宝戒、これ一切仏本源、一切菩薩本源、仏性種子なり。一切衆生に皆仏性有り。一切意識色心は、これ情これ心、皆仏性戒中に入る(『大正』巻二四、一〇〇三頁下)」の文である。安然の『普通広釈』では、『梵網経』の以上の文にもとづいて、戒が以下のように解釈され、この解釈が長く天台の戒解釈の根本とされてきた。

> 如来賓戒、一受永固。終不二犯失一、而有二大用一。譬如下金剛一成二利寶一、更不中破壊上。〈乃至〉真如仏性、以二為戒躰一。一切諸法、皆是戒法躰。何有二非戒之法一、而有二犯戒之法一。(『大正』巻七四、七六六頁中)

すなわち戒とは「金剛宝戒」であるから、あたかもダイヤモンドのようにどのような状況にあっても破壊されることなく、また「真如仏性」であるから、捨てようがない。こうした理論にもとづけば、安然がここに述べている通り、どのような行為も「終に犯失せず」、「更に破壊せざる」ため、天台では破戒が常習していたとされている。[8]

結論から言えば、清算は以上の「一得不捨戒」の理論は、律宗内にも認められるとするのであるが、これについては律宗内で異論紛紜としていたようで、『霊峰記』には以下の三義が紹介されている。すなわち

一・捨義　法相教学と同様に、捨縁があれば戒体を捨失するという義(『龍大本』四八丁裏～)

二・不捨義　天台教学と同様に、「仏性種子」を体とする「金剛宝戒」を受ける以上、一得不捨失であると

する義（『龍大本』五〇丁表～）

三・捨不捨義　捨失の義と、不捨失の義との両義を兼ねているという義（『龍大本』五三丁表～）

の三義である。

このうち、一・捨義においては、円教宗の戒であっても、羯磨等の因縁構造によって受戒するのであるから、この受得の因縁が謝し終われば、戒を失うはずである、という前提の上から論がすすめられる。元来こうした説は、法相教学で主張されていた。経論には戒の捨縁がすでに説かれていて、一得不失の義については説かれていないのだから、高祖・霊師が直接説いていないのであれば、経論の指示にしたがうべきである、ということを趣旨として、五義が説かれている。

二・不捨義においては、菩薩戒は仏性を戒体とするのであるから、受法はあっても捨法はない、という前提の上から論がすすめられる。この説はいうまでもなく、天台教学で主張されるものと同様である。高祖の三大部で円宗について説かれた箇所にも、円宗のことのみについて書かれた『釈文帰敬儀』などにも受儀についてのみ明かしてあり、捨戒については書かれていないのだから、説かれてもいない捨戒義を立てる必要はない、ということを趣旨として、やはり五義が説かれている。

以上の二義を包括する形で提唱されるのが、三・捨不捨義であり、これによれば道宣の唱えた円宗には、性具門と修起門との二門があり、さらに修起門に本性門（不捨門）と因縁門（捨門）の両門が分類されるという。

- 性具門（本有三身の妙性）
- 修起門
  - 本性門（不捨門）（全性……不変の本性）
  - 因縁門（捨門）（而起……随縁の相用）

すなわち性具門は、凡仏等同に本来的に戒体でもある仏性妙体を具えているという理の一面であり、修起因縁門は、受戒という機縁なくして戒体を発得することはないという事の一面である。しかし実際には、修起門においても、受戒によって本来的に有していた仏性を修顕し（本性門）、さらに仏性の無辺の相用が起こってくる（因縁門）と考えられており、本来的に有している仏性にその起源を求める点では、同等の道理であるといえる。すなわち一方で天台の性具戒体の面を認めながら、とはいえ、受戒をしないことには仏性が顕現されないことを主張する理論であると言えよう。

清算は以上の三義について以下のように述べ、第三義の捨不捨の説を支持している。

以前両義之引証、不レ越二今此両門一。以前両義、各々局二一辺一。今此一義兼二両辺一。人師先徳、縦雖レ存二偏執一、経論之誠説、互含二隠顕一。敢不レ可レ存二一辺一。（『龍大本』五四丁裏）

その上で、戒の捨不捨の問題については、以下のような問答を設けて、修起門においても不変不捨の義が実義とされることを主張している。

尋云。於二一戒躰一、捨不捨之両辺、依二修性双具円旨一、誠非レ無二其義一。然者両辺之中、何是実義乎。答。倶是雖二円宗之一義一、不変不捨、是本性天真之実義。更不レ降二爾前偏権一。随縁捨失、是待対之施設。与二偏権一通談也。例如下色・非二・種之三名、倶雖二円旨一、聊有二親疎一上。（『龍大本』五四丁裏）

すなわち修起門の内の本性門と因縁門とは、海水と波浪のような関係性にあり、本来的に具わっている仏性（海水）が、受戒という因縁の風に吹かれて、色であったり、非色非心であったり、種子であったりという戒体の相用（波浪）をとるのみで、その体そのものは変化しないと考えられる。つまりその戒体のはたらきは捨縁によって止めることができるけれども、そうすることによっても戒体そのものの性質は変わらず、また戒体そのものを失ったことにもならないという。このことについて清算は以下のように詳しく解説している。

円宗受捨之両相、全性而起之受躰故、雖レ受非二新得一。修二頭本有仏性之妙性一、起二無辺之相用一、名二受得之戒一故。依レ之雖レ捨レ之。不レ捨二修起仏性種子之躰一。依二因縁一翳障二増明之相用一、此仮名二捨戒之相一。非レ捨二全躰一故、不レ同二権門之受捨一。修起因縁門之受捨、尚不レ同レ権。況於二修起本性門一者、受法倶有無不同、捨法亦有無不同也。有レ権円レ無故。(『龍大本』五五丁裏～五六丁表)

つまり受戒といっても、本有仏性の妙性を修顕するわけであるから、新しく何か特別なものを得るわけではない、また捨戒といっても、仏性の体を捨てるのではなく、因縁によって、その相用を遮ることを、仮に捨戒の相というと主張されている。こうしたことから、清算は、修起門にあっても、戒の不変不捨が実義としては説かれていると見ていたことを知ることができる。

(五) 受戒即成仏について

天台宗では受戒したその日に、即身に六即成仏するとされ、受者の利鈍によって観行即から究竟即のいずれかの成仏を得るという。これについて清算は、受戒のその日に頓成することについては何ら天台と律宗の間に違いがなく、また六即成仏についても、「六即等の名目無しと雖も、義道に於いて、大途には彼の宗と異ならず(『龍大本』六二丁表)」と述べて、道宣・元照などは言及していないものの、受戒者の機根に応じて、悟りの性質に違いがあることを認めている。

しかし、天台が『法華経』の「須臾聞之即得究竟」の説を究竟即成仏を説いたものであると解釈し、『梵網経』の「即入諸仏位」の説を浅位である名字即・観行即成仏を説いたものであると解釈することについては、自宗との異なりがあるとしている。律宗では『梵網経』は、『法華経』同様、専ら究竟の入諸仏位を説いているのであって、浅位の成仏を説いたものであるとは考えない。『梵網経』の「即入諸仏位」の説は、頓悟漸修の解悟の立

場と頓修漸悟の証悟の立場に合わせて説いた説であると解釈する[9]とされ、いずれも究竟の頓悟でありながら、受者によって悟りの種類が異なることを示しているとされる。

まとめ

『霊峰記』後半部分に著された天台・律両宗の相違のうちの二点は、以下のようなものであった。

㈣ 天台宗では戒体を性具の仏性であると考えることから、戒の一得不失を説くが、律宗では天台の性具戒体を一面として認めながらも、受戒の因縁によって仏性の本性を顕現させ、また捨戒の因縁によって仏性の相用を遮るという修起因縁の一面をも認めており、戒の捨不捨を両立させる義を説く。

㈤ 天台宗では、受戒したその日に、受者の機根にしたがって、六即の浅深の悟りを即得すると主張されるが、律宗では、受戒したその日に、解悟か証悟かという区別があるものの、いずれも究竟の悟りを即得すると主張される。

前稿と合わせて、五つの相違点を述べてきたが、これらから知ることのできる清算の考える律宗の要諦は、㈠大乗の菩薩であっても、小乗と同様の戒を受けるべきであり、さすれば、㈡受戒によって戒体たる仏性が開顕され、㈢元照の記述等にあるとおりに、輪廻の主体たる三道と、仏の果徳である三徳とがそれぞれに相即して、㈤機根の優劣に関わらず、受戒した瞬間に究竟の悟りを会得することができる。㈣この戒体はすなわち本具の仏性であるから不失ではあるが、受戒によって顕現し、また捨戒によってその相用が遮断される、というものである。こうしたことから、清算は天台円頓戒の特徴を全て律宗教学の中に取り込んだ上で、これらの特徴を「戒」のみに集約させて説明していくことに、律宗義の核たるものを求めていたといえよう。

註

① 実際、元照は神悟処謙から天台教観を受けていたことが伝記等に明らかである（『仏祖統紀』『仏祖歴代通載』など）。

② 高野山大学図書館蔵本（本論文では「乙本」としてある）には、「𠆢一八守一歟。鉄翁和尚相伝也」との傍注がなされており、「𠆢一」を戒光寺開山の浄業（一一八七～一二七一）が入宋した際に師事した如庵了宏の門人、鉄翁守一のことであると解釈しているようである。確かに戒光寺に秘蔵されていた書物であれば、『果海鈔』は開山の師である守一より相伝された書物であると解釈しても良さそうではあるが、『果海鈔』は「為三台宗上代之先徳、尽三円頓妙戒之深義一記録也」とも説明されており、『終南家業』『律宗会元』など終南律宗に関する著作を残した守一を「台宗上代の先徳」と表現することは不自然である。

『霊峰記』のその他の箇所では、東大寺戒壇院の上に安置されている宝塔の由来に関する記事が「𠆢一之秘記（『龍大本』十一丁表）」に掲載されていると記されており、龍谷大学図書館所蔵延宝五年書写本（本論文では「甲本」としてある）には、このうちの「𠆢一」には「室生山ノコト歟」との傍注が付されていることに合わせて、日本の戒壇の由来に関する記事を守一が記すとは考えにくいこと、さらに別の箇所では「𠆢一山相伝之秘典（『龍大本』二五丁表）」として「𠆢一」が山号として記されていることから、「𠆢一」は𠆢一山室生寺のことであると判断した。

また清算自身、文保元（一三一七）年に、室生寺で『分物古式　南都北京』を書写するなど、室生寺と縁をもっていたことが知られる。

③ 仲尾俊博『日本密教の交流と展開』（永田文昌堂、一九九三。ただし本書所収の論文の初出は、一九七六～九〇年である）、また遠日出典「室生寺に於ける宗教的個性の成立」（遠日出典『室生寺史の研究』第二章、巌南堂書店、一九七九）には、仲尾氏の所論を基本として、円修をめぐる研究史が整理されている。

④ 堀池春峰「𠆢一山図と室生寺」（『日本仏教史学』一一、一九七六）。

⑤ 科学研究費補助金データベースに掲載された、箱崎和久氏の二〇〇〇年度～二〇〇一年度科学研究費助成研究実績報告書『中世室生寺の復興』の二〇〇〇年度研究概要（http://kaken.nii.ac.jp/ja/p/12505777/2000/3/ja）では、空智房忍空の生没年が一二三二から一三一八と確定されており、さらに忍空が「泉涌戒光教律之窟」とよばれた戒光寺の長老であり、戒光寺長老として活動していた延慶元（一三〇八）年に、後宇多法皇の帰依によって、室生寺の潅頂

堂を建立したと述べられている。ただしこの『中世室生寺の復興』は、科研の報告書という性質上、大学図書館等に入庫していないようであり、被閲できていないから、箱崎氏がどういった根拠のもとに、このような結論を出されているのか確認できていない。しかし忍空が戒光寺長老であり、またその在任時に室生寺の復興を行っていたとする箱崎氏の説に本稿は大いに影響を受けている。

⑥ 松尾剛次『勧進と破戒の中世史』(吉川弘文館、一九九五)一四二～一五三頁

⑦ 松尾剛次氏が翻刻研究された『西大寺末寺帳』(前掲註⑥参照)によれば、大覚寺不懐化身院もまた、明徳二(一三九一)年時には西大寺の直末寺となっている。

⑧ 石田瑞麿『日本仏教における戒律の研究』

⑨ 澄観『大方広仏華厳経随疏演義鈔』巻第二十一には、悟りの種類に四義があるとし、このうち頓悟の種類に二義があると説明されている。このうち頓悟漸修の立場を解悟といい、頓修漸悟の立場を証悟というとしている。清算はこの定義にしたがって、解悟・証悟の語を使用していたと考えられる。

頓復有多義。一頓悟漸修。如見九層之台。則可頓見。要須歴階而後得昇。今亦如是頓了心性。即心即仏無法不具。而須積功遍修万行。此約解悟。二者頓修漸悟。即如磨鏡一時遍磨明浄有漸。万行頓修悟則漸勝。此約証悟。三頓修頓悟。如利剣斬糸。千茎斉斬一時斉断。亦如染千糸。一時斉染一時成色。故万行斉修一時朗悟。四漸修漸悟。猶如斬竹節節不同。此今非用。今言悟如日照。即解悟証悟皆悉頓也。(『大正』巻三六、一六四頁下)

キーワード　南北朝、清算、律宗、西大寺

【附記】本稿を作成するにあたり、龍谷大学図書館御当局、高野山大学図書館御当局、伝香寺住職西山明彦師の協力を得て、写本調査をさせていただいた。貴重な資料を閲覧させてくださった関係者方々のご厚情に対しまして、衷心より感謝申しあげます。

附録　清算撰『靈峰記』後半部分(二)

①彼宗②圓極妙戒一得不失之事。〈付一宗同異〉

果海抄云。梵網經云。○③一戒光明。金剛寶④戒。是一切佛本源。佛性種子。一切衆生皆有佛性。一切意識色心⑤是情是心。皆入佛性戒中〈云々〉。廣釋上卷。受此文釋⑥戒躰云。如來寶戒。一受永固。終不犯失。而有大用。譬如金剛一成利寶。更不破壞。〈乃至〉眞如佛性。以爲戒躰。一切諸法。皆是戒躰。何有非戒之法。而有犯戒之法。」(四十七裏)

〈云々〉○四教義一云。圓教所説戒定智慧。皆約眞如實相佛性涅槃而辨。豈同三藏偏淺戒定智慧乎。〈云々〉　○⑦問佛性妙理。正⑧爲戒躰。爲限⑨今家。爲通他⑩宗。　答大日經疏云。淨菩提心。其性法爾。如金剛故。極堅固性。即是不從師得。住無爲戒。無垢無濁。不可破傷。○心之本性。即是尸羅。非造作法。○住斯戒故。實智增明。焉⑪見不思議中道。〈云々〉⑫業疏記云。行者當知本⑬受躰。即是一躰三佛之⑭種。〈云々〉○⑮起信論○一切法從本已來。離言説相。離名字相。離心緣相。畢竟平等。無有變異。不可破壞。唯是一心。故名眞如。〈云々〉此文殊明。

〈彼鈔正文〉尋云」(四十八表)

如彼宗立義引證者。梵網頓大之妙戒。是其躰眞如佛性故。其名既⑯號金剛寶戒。故一受以後。更不可有捨失云。然者終南一家⑰。可同此義乎。　答此條一代戒家之大義。仍諸家⑱存異見。謂新家大乘。以戒躰爲有爲緣生依他⑲如幻之法。依之彼所依之論藏。立二四之捨緣。因緣若謝。捨失其躰判之。臺宗等之意。無爲佛性之妙戒如金剛。一成更無壞故。盡未來際。更⑳不可捨失定之。

---

①＋（○）甲
②宗＋（之）乙丙
③〔○〕―甲
④〔寶〕―甲
⑤〔心〕―甲
⑥釋＋（□）甲
⑦〔○〕―甲
⑧〔正〕―甲
⑨限＝根甲
⑩他＝佗甲
⑪〔焉〕―甲、焉＋（不）乙
⑫〈云々〉＋（又）丙
⑬本＋（所）甲乙
⑭佛之＝寶甲
⑮〔○〕―甲
⑯〔既〕―甲
⑰家＝宗乙丙
⑱家＝宗乙丙
⑲他＝佗甲
⑳更＝受甲

然而今就終南一宗。先哲之義勢不一純。當①焉②亦難決。且有兩三之義。一義云。如新家大③。依二四之捨縁。可捨失戒躰。先縦雖圓宗之極談。作」（四十八裏）

法受得之戒。是依羯磨等之因縁構造。既待因縁有。受得因縁若謝者。何無捨失乎。〈是一〉依此④勘靈師圓宗受躰之釋。梵網⑤頓大之受儀之中。破他⑥師佛性戒躰之義云。戒受始得性雖本有。非修不發。如摩尼等。〈云々〉又業疏圓宗之濟縁。要期⑦施造方便。乃至由薫⑧成業。々⑨圓成種々⑩有目用等。〈云々〉釋文分明。圓宗之戒躰。必⑪是施造方便。依修成其躰。成法必可有謝滅⑫若云佛性爲躰。成無捨失旨者。靈師之能破。還可負自宗者乎。⑬〈是二〉加之章之中。破他⑭宗眞性爲躰之義。頻立新成種子爲躰之義。述其種子之躰。濟縁之中。出從衆縁生⑮」（四十九表）

出生倍多等之十義。悉有爲縁生⑯之相也。然者縁生之法。豈無縁謝捨失之義乎。〈是三〉又如彼臺宗一家之釋者⑰。依佛性金剛寶戒之説。強成一得不失之道理歟。還經文有相違。彼經初明佛性戒之受⑱儀。衆生受佛戒即入諸佛位等説之。後明佛性⑲戒犯失之過。亦失佛性常住妙果等述之。然者彼經自於佛性金剛戒。説犯失之過。人師何依彼經。成一得不失之義乎。可知彼經所説。佛性金剛寶戒之得名。且如太賢等之釋。於新成戒躰之種子。號本具自性之名歟。彼經佛性種子之種子⑳言。縁起縁成之戒躰爲言。是則同」（四十九裏）

佛種從縁起法華之説。亦冥靈師之破眞性爲躰。以種㉑爲㉒躰説者乎。〈是四〉又受捨等之法相。可仰三藏之明判。善戒持他㉓。是專高祖之所用。

①當＝焉丙
②焉＝學甲、焉＝時乙、焉＝當丙
③大＋（乘）甲乙丙
本傍注曰義歟
④此＝之甲
⑤網＋（經）甲
⑥他＝佗甲
⑦期＝斯甲
⑧薫＝熏丙
⑨々＝業乙丙
⑩々＝種乙
⑪必＝如甲
⑫〔滅〕―甲
⑬乎＋（云々）甲
⑭他＝佗甲
⑮生＋（乃至）甲
⑯爲縁生＝約生縁甲
⑰〔者〕―甲
⑱受＝愛乙
⑲性＋（性）丙
⑳〔種子〕―甲
㉑種＋（子）甲丙
㉒爲＋（戒）甲丙
㉓他＝地丙

彼經論殊於①菩薩戒立捨緣。豈背彼經論之明判乎。況復②敬儀圓極之說③。專今④依持地⑤。何癈⑥高祖最極所引之論判乎。若亦捨此等經論者。何經論分明說一得不失之義乎。抑亦兩祖之釋之中何釋處分明述於圓戒不立捨緣旨乎。經論之說。捨緣明鏡兩⑦祖之釋義不分明者圓戒捨緣之一義可成⑧者乎。〈是五〉一義如是。一義云。高祖圓極之妙戒⑨。雖有受法之儀⑩。更不可捨失。其故」（五十表）

大途如前所引臺宗立義⑪引證。凡高祖圓極之妙戒者勘教本梵網之說。既號佛性種子金剛寶戒自性清淨心戒。其⑫本覺佛性自性清淨心者。是諸佛之本源。天眞之靈性也。豈依有爲捨失之因緣。假成變⑬動破壞之義乎。又金剛寶戒之得名。是一成利寶。永堅固以無破壞爲功能。若於此圓戒。云⑭有壞失者。佛性之躰。金剛之得名。偏可成虛說。能⑮圓頓大之教。對誰機設隨他⑯意之虛說乎。如以前立義者。於此經說。強致或攝相歸性。或攝用歸躰等之會通歟。凡探經說之因邃。顯⑰圓宗之⑱深義。先哲常之習也。何遑會明鏡」（五十裏）

之經文。於圓極之妙躰。剩⑲成可⑳破壞轉變之鍛㉑僅乎。依之宗㉒教之人師。并臺宗可信之。先德皆就此佛性金剛寶戒之祕說。成眞如爲躰。一得不失之旨。〈是一〉加之尋一家之釋義。濟緣之中。依梵網之說。判圓極妙戒之躰云。常住佛性妙理爲躰。乃至則是一躰三佛之種子㉓。〈云々〉臺宗之先德。海鈔之中。引此濟緣之文。證圓戒無爲㉔不失之義。佗㉕家㉖猶爾。自宗㉗之學者。豈不存其旨乎。重定其佛性種子。有爲無爲之躰。至次下域心之釋段云。今知唯識無有外塵故。正受時徧㉘緣法界。結成種

①於＝出甲
②〔復〕―甲
③說＝談甲
④今＝令乙
⑤地＝他甲
⑥癈＝廢甲乙
⑦兩＋（□）甲
⑧成＋（立）乙丙
⑨戒＋（者）甲
⑩儀＝義甲丙
⑪〔義〕―甲
⑫〔其〕―甲
⑬變＝受丙
⑭云＝之甲
⑮能＝純甲乙
⑯他＝佗甲
⑰〔顯〕―甲
⑱之＋（頓）甲
⑲剩＋（可）甲
⑳〔可〕―甲
㉑鍛＝假甲
㉒宗＝蜜丙
㉓〔子〕―乙丙
㉔〔爲〕―甲
㉕佗＝他甲乙丙
㉖家＝宗乙
㉗宗＝習甲
㉘徧＝編甲

子①爲戒躰。應知能發所發②。能熏③所④熏⑤。無非心」（五十一表）

性。心無邊故。躰亦⑥無邊。心無盡故。戒亦⑦無盡。〇⑧其實爲佛乘。此即行人域心之處。〈云々〉此釋分明述佛性種子之圓戒。妙觀相應故⑨。無爲心性旨。然者心性是無爲常住。豈有因緣捨失之義乎。次下心無盡故。戒亦無盡之釋。專成其旨者乎。〈是二〉又勘一家釋義。業疏小教々⑩宗⑪之濟緣云。問有犯則躰羸。四捨則戒失。那云無惱壞耶⑫。答缺行故羸。本得無損。教權故失。業性不亡。此即成宗通深⑬之意。〈云々〉此釋意者。小教分齊。猶依四捨⑭因緣。成業性不失之義。高祖⑮宗正義之釋段云　問如正義論。熏⑯本識藏。此是種子。能爲後」（五十一裏）

習。何得説爲形終戒謝。　答種由思生。要期是願。々⑰約盡形。之⑱終戒謝。行隨願起。功用⑲超前。功由思⑳生。隨心無施㉑故。偏就行能起後習。不約虚願。來招樂果。〈云々〉此釋意者。雖假宗小教之戒躰。以圓意見之。其種子故。雖有四捨之緣。戒躰不失爲言。此兩釋既於小教之談。或依分通。或寄種躰。猶成四捨不失之義。況復於純圓頓大之妙戒。何假論因緣捨失之旨乎。〈是三〉就此圓旨。尋大部處々之釋義。殊勘業疏三宗教宗正義之釋段。於有空兩宗。雖述捨戒之不同。於第三圓宗之談旨。明受儀更不聞捨戒之説。其外敬儀等之」（五十二表）

圓談。受儀之外。亦不見捨緣㉒之文。釋文若不分明者。豈任胃㉓憶。立圓戒捨緣之一義乎。〈是四〉況復案本業經云。菩薩戒有受法。而無捨法。有犯不失。盡未來際。〈云々〉此文明鏡也。諸家就此經説。致種々會通歟。臺宗以此經説。殊爲本據。成一得不失之義。今一家亦任經文之㉔明

①子＋（自）甲丙
②〔所發〕―甲
③熏＝薰丙
④所＋（所發）甲
⑤熏＝薰丙
⑥亦＝爾甲
⑦亦＝爾甲
⑧〔〇〕―甲
⑨〔故〕―甲
⑩々＝教乙丙
⑪〔宗〕―甲
⑫耶＝云々甲
⑬通深＝遍源甲
⑭捨＋（之）乙丙
⑮祖＋（假）乙丙
⑯熏＝薰丙
⑰々＝願乙
⑱之＝形乙丙
⑲用＝能丙
⑳思＝必甲
㉑施＝絶甲丙
㉒〔緣〕―甲
㉓胃＝胸甲乙丙
㉔〔之〕―甲

鏡。專可爲不失之證誡①。彼經説②既述有受法無捨法之由。盡心爲躰説之。其心者。梵網所説諸佛本源自性清淨心之躰也。其自性清淨心。豈依捨戒之因緣。有捨盡之義乎。其心更不可盡。戒躰不失無疑。濟緣所述能發所發無非心性。心無邊故。戒亦」（五十二裏）

無邊之③尤。合彼④盡心爲躰之經説者也。加之濟緣亦述圓戒受得之相云。全性而起。還依性住。經生滅等。〈云々〉此全性々⑤住。述戒躰不滅之由。其性是⑥眞性⑦天眞常住躰也。其全性々⑧住。修性不二戒躰⑨寧有失捨之義⑩乎。眞性既常住。全性之戒躰。不失不滅之理。極成者乎。一義之綱⑪概如是。〈是五〉一義云。高祖圓極修起之妙戒可存捨不捨之二邊。不可思偏執。一代戒門之捨不捨。於義道文證者。以前兩義。大畧盡之歟。皆是如來内證之金言。於⑫一佛乘。分別説三之圓旨也。以不偏計。爲高祖不失⑬之極談。極小之偏計。尚取之備佛」（五十三表）

乘。況戒躰⑭捨不捨。大乘談之。豈此兩邊。捨圓宗之外乎。凡就終南一宗⑮圓極之妙戒。聊可存修生⑯之二門。謂先性具者。本有三身之⑰妙性。靈師云⑱。所謂性雖本有之躰是也。此本有之妙戒。則天眞本覺之靈性。凡佛等同。本來所⑲具之⑳妙躰也。起信述此躰云。是故一切法。離言説相。離名字相。離心念㉑。畢竟平等。無有變易。不可破壞。唯是一心故名眞如。〈云々〉於㉒此性具㉓之妙戒者。更不可論捨不捨之兩相。次修起者。全性而起之妙戒。即是一躰三佛之種子也。此修起之躰。則全性而起。還依性住。而雖有能發所發無非心性之理。酬」（五十三裏）

---

①證誡＝誡證乙
②〔説〕―甲
③之＋（盡）甲之＋（釋）乙
④彼＝波甲
⑤々＝性乙
⑥是＋（天）甲
⑦甲本傍注曰三字〈天眞性〉不審
⑧々＝性乙
⑨修性不二戒體＝述戒躰不滅之由其性甲
⑩義＝儀甲
⑪綱＝網甲
⑫於＝出甲
⑬失＝共丙
⑭〔躰〕―甲
⑮宗＝家甲
⑯生＝性乙丙
⑰〔之〕―甲
⑱云＝之甲
⑲所＝本甲
⑳〔之〕―甲
㉑念＋（相）甲丙
㉒於＝出
㉓具＋□甲

受前之大解①。羯磨師僧之緣力。既盡②全性而起。號成善種子。具③寄因緣門。就此修起之戒躰。可談捨不捨之兩門。謂於④受得之妙躰。全性之故。既眞性之全躰也。有爲之捨緣。不可捨失之。而起之故。既依受緣。有起興緣謝者可捨之。是則全性不變之本性而起。隨緣之相用故。一戒躰之二義不可相離。濟緣所述隨緣不變。々々⑤隨緣之釋義此意也。譬如海水⑥濕性之全躰成波浪。雖顯起滅之相用。其濕性不動無起滅。修起門之戒。亦復如是而起。隨緣之門。雖顯捨失之相用。全性不變之本⑦性。更離捨失之相。濟緣所明譬」（五十四表）

如巨海浪⑧。無有若干相之釋。專可思之。以前兩義之⑨引證。不越今此兩門。以前兩義。各々局一邊。今此一義兼兩邊。人師先德。縱雖存偏執。經論之誠說。互含隱顯。敢⑩不可存一邊。尋云於⑪一戒躰。捨不捨之兩邊。依修性雙具圓旨。誠非無其義。然者兩邊之中。何是實義乎⑫答俱是雖圓宗之一義。不變不捨。是本性天眞之實義。更不降爾前偏權。隨緣捨失。是待對之施設。與偏權通談也。例如色非二種之三名。俱雖圓旨⑬。聊有親疎。尋云此修起不變不捨之一邊。是天眞之性具也。何是爲修起門之實義乎。答一家之」（五十四裏）

意。隨緣即不變談之。隨緣之即⑭相天眞不改也。是尚號修起之一義。其義雖同性具。修性二門之中性具。不可監⑮之。謂海水本來證靜⑯。以波浪不動位。名性具不變。波浪既雖動。濕性尚不變也。此號隨緣即不變。此不變尚修起隨緣之上談旨故。尋云此修起不變之一門。既不變無捨法。々々々⑰若無者。同性具門。受法亦可無乎。答既號修起因緣門。何⑱云無受法乎。戒躰本覺之⑲佛性。始終天眞雖古今無別。非無出纏之差異。今此修起之本性。既修顯出纏。是假號受。其一出纏修顯之妙德。更無還纏迷理。故不立捨失之」（五十五表）

①解＝翁甲
②盡＝釋甲乙丙
③具＝且丙
④於＝出甲
⑤々々＝云々甲、々々＝不變乙丙
⑥水＋（之）乙
⑦〔本〕―甲
⑧浪＝波甲
⑨之＋（立義）甲
⑩〔敢〕―甲
⑪於＝出甲
⑫乎＝云々甲
⑬旨＝宗甲
⑭即＋（天）甲
⑮監＝濫乙丙
⑯靜＝淨甲
⑰〔々〕―甲、々々々＝捨法乙丙
⑱何＋（何）甲
⑲〔之〕甲

法。尋云今①此而起因緣門之一邊。既有受得。亦②有③捨法。若然者其受得捨法之兩相。可同爾前權門之受捨之義乎。答大不同也。先權門之戒躰。不談此旨④有爲依他⑤之受躰故。因緣構造始得之捨戒。亦捨失未曾之全躰。⑥次圓宗受捨之兩相。全性而起之受躰故。雖受非新得。修顯本有佛性之妙性⑦。起無邊之相用。名得受⑧之戒故。依之雖捨之。不捨修起佛性種子之躰。依因緣暨⑨障增明之相用。此假名捨戒之相。非捨全躰故。不同權門之受捨。修起因緣門之受捨。尚不同權。況於修起本性門者。受法俱有而⑩不同。捨法」（五十五裏）

亦有⑪無不同也。有權圓無故。尋云以戒躰不捨。爲圓宗之實義者。濟緣教宗之段⑫。教權故失。業性不已⑬假宗通深⑭之意釋之。業疏假宗正義之問答。就圓宗之意。答種存願捨之旨。然而彼戒躰不捨之兩文。今此段⑮起一門之全性。不變不捨之一邊。因緣捨失之義邊。兩邊之⑯中。就何義邊述之乎。答此事就進退雖難定。且一義云。凡⑰修起之⑱全躰。不變不捨之一邊。大乘尚權門不談之。況假宗分通正義之分齊。爭可談之乎。然者彼兩文且就修起因緣捨失之門。捨不捨兩門之中。此⑲一門降爾前之權。捨失之一義也。尋云。」（五十六表）

彼業疏本來⑳分通。〈并〉假宗正義之兩文。或云業性不已㉑。或云種子不捨。皆述戒躰不捨失旨。何此㉒令同因緣捨失之門乎㉓。捨不捨之義相違故㉔。答此條誠其文言。雖似相違。義道㉕實不異。謂圓宗因緣門之意。以種子爲戒躰。令具能用。若捨戒之因緣來位。以能用之暫㉖止。假名捨戒㉗。其種子戒躰。全不捨失。然閒㉘捨失暫㉙是從㉚用能。假施設之門㉛也。從種躰則

①今＝令甲
②〔亦〕―甲
③有＝者甲
④此旨＝本有乙丙
⑤他＝佗甲
⑥躰＋（○）丙
⑦〔之妙性〕―甲
⑧得受＝受得甲乙丙
⑨暫＝暫甲
⑩而＝無乙
⑪亦有＝□甲
⑫段＝假甲
⑬已＝亡甲乙丙
⑭深＝源甲
⑮段＝修甲、段＋（緣）乙
⑯〔之〕―乙
⑰〔凡〕―甲
⑱〔之〕―丙
⑲此＝彼乙
⑳來＝末丙
㉑已＝亡甲乙丙
㉒此＝是甲
㉓乎＝更甲
㉔故＝哉甲
㉕道＝邊甲
㉖暫＝暫甲
㉗戒＝失甲
㉘閒＝間丙
㉙暫＝暫甲
㉚從＋（乎）丙
㉛門＝閒乙

以不捨爲實義。然而彼假宗教源。不談種子戒躰故以用能①爲實躰②故。四捨之緣來。全躰失談之。此釋教權故失。分通正義之意。密通種躰故。有躰不失之意。此釋業性不已③」（五十六裏）

通深④之意。或種存⑤願捨等述之。然者此圓宗因緣門。種躰不失⑥之實義。彼假宗分通。并正義段之種子不失之義。全同不異。但是假宗通深⑦之部意。密可通種子之義。故以圓意扶之。業性不已⑧。乃至種子不失等談之。爲明文律論等分明不明之歟。尋云小乘分通之談種。尚依談種。存戒躰不失之義。然者善哉⑨持地等之經論。既顯了談種子。何述戒躰捨失之義乎。答依高祖種子戒躰之意。彼經論以種子爲躰。具用能故。雖立捨緣。捨用能不捨種子戒躰。可談之歟。然者自可同業性不已⑩之分通⑪。能受之發心。通善戒故。」（五十七表）

尋云。彼善戒等之種子戒躰。不同今此圓宗因緣門之種子戒躰乎。答不同。彼善戒等之種子戒。戒⑫不談眞如隨緣故。局⑬有爲依他之躰。今此圓宗因緣門之種躰⑭。全性而起⑮。還依性住談之。故即隨緣之種躰。談全性不失之一義。彼爾前善戒等無此義故。是以以⑯彼善戒等之戒。比今此圓宗因緣門之種子戒躰。可有三之不同。謂一者性具修起。有無之不同。彼不談性具之躰。此談性具修起之二躰故。二者因緣門之種子戒躰。有爲無爲⑰之不同。彼不談全性而起故。偏屬⑱有爲生滅。此全性而起之種子故。雖現有爲之」（五十七裏）

相。其全躰無爲常住故。是則無爲實義。有爲假名字説也。三者能用失⑲不⑳之不同。彼不談全性而起之能用故。捨戒之因緣來。則實失捨其能用。非再受更不相續。此全性而起之能用故。依因緣暫止增明。假名捨失。全性而起之㉑能用。實不捨失。故不捨失實義。捨失假名字説也。以上一義之意㉒。就圓旨雖有捨不捨之兩邊。以有受法無捨法。可爲圓宗之

①用能＝能用甲
②躰＝義甲
③已＝亡乙丙
④深＝源甲
⑤存＝子甲
⑥失＝捨甲
⑦深＝源甲
⑧已＝亡乙丙
⑨哉＝戒丙
⑩已＝亡乙丙
⑪通＋（旨分通）甲
⑫戒＝躰乙丙
⑬局＝屬甲乙
⑭〔躰〕―乙
⑮〔而起〕―甲
⑯〔以〕―甲
⑰〔無爲〕―甲
⑱屬＝局甲乙丙
⑲失＝共甲
⑳不＋（失）甲
㉑〔之〕―甲
㉒意＋（者）甲

實義。捨失之一邊。圓中隨宜之施設也。凡而最初頓大之梵網。說三身之修因。名金剛寶戒。終窮至實之涅槃說三聚之大果。號金剛不壞身。兩經互就戒因果同。說金剛」（五十八表）

不壞之名。果既金剛故。不壞不失。因寧同名金剛。成壞失之義乎。況復即是一躰三佛之種。靈師之定判。併任梵網之說。是則正因佛性之躰也。豈以壞失有爲之正因。可成不壞常住之三身乎。加之亦彼梵網衆生受佛戒位同大覺位等說之。他宗此爲六即成佛之位。靈師亦①三聚三身。說有異時。位俱時判之。是則雖有頓悟漸修。實修實證之兩機。共成佛之位也。然而彼衆生受佛戒。是始覺修成之義。位同大覺位②。則還同本覺之位也。然者始覺修成之故。可有修顯修成之受法。還同本覺之法③。更④無失壞還迷之理。故」（五十八裏）

不立捨戒之法。是則本業所說可冥有受法而無捨法之說。廣釋所述圓宗⑤戒但有受法。終無破法。故名虛空不動金剛戒。〈云々〉靈師亦釋全性而起。還依性住。經生不滅。〈云々〉皆是存頓大之經旨者乎。加之勘高祖之釋。爲一處於圓宗之妙戒。不及捨緣之談。深可思之。於本覺佛性圓極妙戒者。無捨失之法。可爲玄門之實義。但因緣施設之一門。非無其義。

○彼宗之圓戒。名果分戒。又受戒⑥時。六即成佛事。〈付一家同異〉

果海鈔云。又普通廣釋上云。圓乘戒法。但有受法」（五十九表）

終無破法。故名虛空不動金剛寶戒。〈云々〉○問正以圓戒。名果分戒。其證如何。答普通廣釋上云。今約跨節明淺深者。前三戒果。唯名菩薩菩提。圓乘戒果。的名如來菩提。前三戒法。唯名三聚淨⑦戒。圓乘戒⑧法⑨。的名⑩虛空不動金剛寶戒。前三戒行。唯名歷劫修行。圓乘戒行的名大直道⑪行。前三戒證。歷無量劫。最後現身成佛。圓乘戒證。受戒之日。即身六

①〔亦〕—甲
②位＝已甲
③法＝位甲
④更＝文甲
⑤宗＝乘甲
⑥戒＋（之）乙
⑦〔淨〕—乙丙
⑧〔果的名～圓乘戒〕二十文字—甲
⑨法＝行甲
⑩〔名〕—甲
⑪道＝通甲

即成佛。〈云々〉問圓戒行者。六即成佛如何。答廣釋下卷云。無始已來。尚是理性即身成佛。初聞自心五分法身。號爲①名字即身成佛。今受自心五分戒身。名爲觀行即身成佛。若」

（五十九裏）

入十信。得六根淨當爲相似即身成佛。若登初位②。入四十一地。當爲分眞③證即身成佛。若昇妙覺。安住佛地。當爲究竟即身成佛。亦名六即菩提④。〈云々〉○⑤問廣釋上卷云。梵網經云。衆生受佛戒即入諸佛位。是即身入名字佛位。〈云々〉今何相違。指受戒人。云觀行即耶⑥。答彼釋且約下々⑦品機。故⑧上卷云。大圓覺云。一切衆生本來成佛。是理即佛。梵網經云。衆生受佛戒即入諸佛位。是即身入名字即⑨佛位。下々⑩根。仁王經曰⑪。受持讀誦。即爲佛道。即身入觀行佛位。是下中根。普賢經云。行者即得六根清淨。是即身入相似佛位。是下上」（六十表）

根。無量義經云。受持此經。即於是身。得無生忍。是即身入習種佛性⑫。是中下根。即身若⑬入性種。是中々⑭根。即身若入道種佛位。是中上根⑮。又云昇於菩薩第七之地。是即身入聖種佛位。是上下根。即身若入等覺佛位。是上中根。法華經云。須臾聞之即⑯究竟阿耨菩提即身入妙覺位。是上々⑰根。當知圓乘戒法。但有持果。〈云々〉釋文分明。且約下々⑱機。即云名⑲名字佛位。○玄義一云。世間⑳相常住理即也。於諸過㉑去佛。若有聞一句。名字即也。深信隨喜。觀行即㉒也。六根清淨。相似即也。安住實智中。分眞即也。唯佛與佛究竟盡實相。」

（六十裏）

究竟即也。〈云々〉既聞一句。名字即也。何況受戒之時。聞萬法一心之

①〔爲〕―甲
②位＝地甲
③眞＝身甲
④提＝薩丙
⑤〔○〕―甲
⑥耶＝乎甲
⑦々＝下丙
⑧故＋（彼）甲
⑨〔即〕―甲丙
⑩々＝下丙
⑪曰＝云甲丙
⑫性＝位乙丙
⑬〔若〕―甲
⑭々＝中丙
⑮〔即身若入性〕～〔是中上根〕二十二文字―乙
⑯即＋（得）甲乙丙
⑰々＝上丙
⑱々＝下丙
⑲〔名〕―甲
⑳聞＝間乙丙
㉑過＝遇丙
㉒〔即〕―甲

佛性①。豈非名字。三羯磨時。致隨喜心。合渴仰掌。何疑觀行。○②一切衆生本有性德。眞如妙戒。是理即分齊戒師。亦③顯眞如性戒。名字即位④。當開導時。復令作法受行。即是觀⑤即位也⑥。受戒已來相似即位⑦。已下應知。〈云々〉〈彼抄全文〉尋云臺宗之意者。廣釋之中。述頓大受戒之相。圓乘戒受得之日。即身六即成佛等釋之。依圓人之⑧利鈍。觀行即乃至究竟即成佛。不依階漸云。然者今此終南一家⑨。亦可同此義乎。　答勘一家之釋義。圓教⑩本之梵網。既即入諸佛位說之。靈」（六十一表）

師亦請此圓經之頓旨。不由⑪階漸。直造佛乘等述之。又三聚三身。俱時非前後釋之給。頓成之條。不及子細。但依圓機之利鈍。六即成佛之事。釋義雖不分明。高祖第三圓宗之中。專雖依法華涅槃純圓之教。亦攝善戒等之帶權藏⑫熏習之教。依之妙觀相應之大解。含直爾歷事利鈍之觀念。亦兼有相唯事之發心。如然既可有機教利鈍發心淺深。然者經所說。即入諸佛位。亦可含利鈍之圓人。謂順理頓達之圓人。冥須臾聞之即得究竟之妙旨。受戒之一念。入實修實證佛位。順情漸入之圓人。實證雖漸修。頓知已」（六十一裏）

性高軌之一念。便有即入諸佛之理。如是圓機有利鈍。入佛位亦可含解悟證悟之不同條豈疑之乎。雖無六即等之名目。於⑬義道者。大途不異彼宗。但廣釋竝⑭先德之鈔⑮意。圓戒雖成通六即成佛旨。以梵網之即入諸佛位之說。爲名字即觀行即之分齊。以法華之須臾聞之即得究竟之說。證究竟即。就此兩文。法華之究竟即尤可然。經既即得究竟說之。故以梵網所說之即入諸佛位。終⑯局名字觀行條。難同彼宗。圓戒既通六即者梵網專可說究竟之入諸⑰佛位。何強可說爲淺位名字觀行之分齊乎。其意趣尤不可然。以知彼」（六十二表）

①性＋（戒）甲
②〔○〕―甲
③亦＝示甲丙
④位＋（也）甲
⑤觀＋（行）甲、觀＋（○）丙、丙本傍注曰行歟
⑥〔也〕―丙
⑦位＋（也）甲
⑧〔之〕―甲
⑨家＝宗甲
⑩教＋（教）乙丙
⑪由＝依甲
⑫藏＋（識）乙丙
⑬於＝捨甲
⑭竝＝并丙
⑮鈔＝妙乙
⑯終＝纔乙
⑰〔諸〕―甲

即入諸佛位之説。必通解悟①證悟之佛位。亦可含順理順情之二機。依之有明近②云。梵網所説。俱雖含兩機之頓成。即入諸③佛位。説順理實證之佛位。④即⑤入佛位明之故。位同大覺位⑥。説順情解悟之佛位。既同大覺⑦述之故。入同之兩字不徒然。誠可得心云。明近⑧誠有子細歟。兩句⑨若全同者。重言無由乎⑩。思之於此一門有同異兩邊應知。尋云彼鈔引廣釋所述圓乘⑪果的名如來菩提之文。梵網頓大之戒。即成果海果分之行躰旨。然者終南一家⑫。可同彼義乎。答此事凡一代之説教⑬。悉無從果分内證不起。雖然約因機之所領。」(六十二裏)

此可號因分。是以華嚴之賢首大師。佛所知佛所行名爲果分。菩薩所知。菩薩⑭所行。名爲因分。〈云々〉此意也。但彼宗果分之可説不可説。及異論歟。一代之大途如是。別於今此頓大之妙戒者。餘學餘教。不共之説故。不攝⑮凡因⑯其機應頓旨。則成果分果海之行躰條。不及疑殆。毘尼之戒制異餘學。從如來内證起。非因人之分限條者。惣律藏亦談之。況圓極頓大之妙戒者。餘學⑰餘教。超過不共之談旨也。所謂能説之教主。是臺上之舍那。亦通葉上葉中之化佛。殆或法身。或自受用。及人師之異説。顯宗之中。終⑱雖有報佛之説。」(六十三表)

未更及法身自受用等之異論。是則隣祕密教主故歟。是⑲不共也。次説處⑳。則及欲界二地四天。乃至色界四禪。十住處之説。高山頓大之華嚴雖及欲界天七處八會之説處。曽不至色界四禪摩醯㉑首羅天之説處。是亦同祕密之説處㉒故歟。是二不共也。次勘所得之妙躰。亦所行之處。如梵網之説者。衆生受佛戒即入諸佛位佛性金剛寶戒等。〈云々〉如心地觀經者。從凡夫地直入如來祕密法門無爲之戒等。〈云々〉兩經之説明鏡也。頓大戒門不共之深義。既㉓凡下有漏一念之識藏。懸濫果海無漏無邊之果德。即身頓成。同大覺」(六十三裏)

---

①〔悟〕—甲
②近＝匠甲乙
③〔諸〕—甲
④位＋(既)乙
⑤即＝既丙
⑥位＝已甲
⑦覺＋(位)乙
⑧近＝匠甲乙
⑨句＝同甲
⑩乎＝受甲
⑪乘＋(戒)甲
⑫家＝宗甲
⑬教＝經乙
⑭〔菩薩〕—甲
⑮攝＝隔乙丙
⑯因＝位甲
⑰〔餘學〕—甲
⑱終＝縱乙
⑲是＋(一)甲、是＋(一之)乙
⑳處＝教甲
㉑醯＝醯甲乙
㉒處＝所乙
㉓既＝即甲

之位。所得既然。所行亦修佛果之内證。如所行所説之法門。亦説果分果海之法條豈疑之乎。依之經中釋迦問舍那。々々①自説心地妙戒之祕藏。此是佛問佛答之祕説。唯佛與佛之妙旨也。此故於此戒者。如來果地之中。尚我今半月自誦諸佛法戒説之。是則如來以果海内證之妙戒。直授②頓大之内③機。不改因人所領④之圓戒。住佛果自證。還復半月々々⑤誦之。戒家之一門。餘學超過不共之條。誠以明鏡也。抑於何教何⑥學。聞此等之祕説乎。是亦隣祕密之深義故歟。是三不共也。密教之人師。皆以梵網爲摩醯⑦首羅宮」（六十四表）

金剛頂經之同會。誠可有子細。以顯經普通之説。不可生疑謗。

⑧彼宗圓頓妙戒之行人。果海修行之相事。〈付一家同異〉

果⑨鈔云。問此圓頓戒受持行者。果海修行其相如何。答一心傳戒中卷云。梵網經云。我已百劫修行是心地。號吾爲盧舍那。道璿和上釋此文云。修行者天臺師説修行一切法不生不滅不常不斷不一不異不來不去常住一相。猶如虚空。言語道斷。自性清淨。是名修行。如是行人。於自性清淨心中。不犯一切戒。是則虚空不動戒。又於自性清淨心中。安住不動。如」（六十四裏）

須彌山。是則虚空不動定。又於自性清淨心中。通達一切法無碍自在。是則虚空不動⑩慧。如是等戒定慧。名盧舍那佛。〈云々〉此釋意者。自性三學⑪。一心具足。令安住自性清淨。是則修儀也。〈云々〉〈彼鈔全文〉尋云。如彼宗者。圓戒之行人。住八不妙觀。以自性清淨不動眞際。爲戒行之相名⑫。然者終南一家之戒行。可同此義乎。答是則可云理在絶言。靈師要義之中。凡⑬爾持戒不了觀慧。此則人天福報。〈乃至〉淨名云。了達法空。是名持戒。〈云々〉圓極妙戒。止作修行妙觀相應之條。釋文明鏡也。是以圓宗濟緣之中。圓人隨行。勸能發所發。無非」（六

①々々＝舍那丙
②授＝援甲
③内＝因甲丙
④領＋（所得）甲
⑤々々＝半月乙丙
⑥〔何〕―乙
⑦醯＝醢甲乙
⑧＋（〇）甲
⑨果＋（海）乙丙
⑩〔定又於～空不動〕二十四文字―甲
⑪學＝字甲
⑫名＋（之）乙
⑬凡＝汎乙

十五表)

心性之域心。其心性之域心。是眞際離念之處也。戒儀亦由制心戒動即違理述之。心地實相之戒。以動細念爲犯戒。反知不動眞際。是圓極妙戒修行事。此條大途雖同彼宗。如彼宗①釋者。自性清淨。八不不動等之觀相。悉通自性之三學。不局②戒家之一門。一家之意不然。皆是戒家一門之德相。假開定慧之功用計也。謂寶積經之中。文殊對波③離。明毘尼九種之深④義。其深⑤義者。寂滅究竟我不可得本性清淨如々實際不來不去不思議無住々⑥虛⑦際三世平等。諸佛世尊。依之成道。不善觀察。則爲遠離如來淨戒。〈云々〉今」(六十五裏)

此九種之深義。則圓極妙戒之躰性。亦修行之全相也。然者彼宗⑧八不中道。是寶積之如々⑨實際不來不去。毘尼之躰。梵網後序之觀察諸法眞實相不生不滅不來不去等之戒相。尤冥寶積之説。又彼宗之自性清淨。是寶積之本性清淨毘尼。此亦梵網之自性清淨心戒之躰也。又彼宗之虛空不動之定慧。是寶積之住虛空際三世平等毘尼之全躰也。然者彼宗所出諸相。皆是圓極妙戒之自躰也。分相用且假名定慧。戒躰之外。別自性之三學。非可各⑩立。此旨大異彼宗意。所詮圓宗之⑪行人。住生佛同源之域心。不動眞」(六十六表)

際之處。是一佛乘之戒行也。日用時須勿廢之。躰用開三學俱時之戒行者。高祖之敬儀。靈師之芝蘭如⑫載之。穴賢不可濫。三躰各立他家之三學。俱時以上之相傳如是。凡此私抄之由來者。以𠂉一⑬相傳⑭之果海鈔。爲本質記之。彼果海鈔⑮者戒光寺相傳祕義⑯之書。爲臺宗上代之先德。盡圓頓妙戒之深⑰義記録也。明師相傳云。從大唐神堯皇帝以來。於終南高祖之戒家。一門之宗義觀

①宗＋(之) 乙丙
②局＝屬乙
③波＝彼乙
④深＝源甲
⑤深＝源甲
⑥々＝住乙丙
⑦虛＋(空) 甲乙
⑧宗＋(之) 甲
⑨々＝如丙
⑩各＝名甲
⑪〔之〕―甲
⑫〔如〕―甲
⑬𠂉一乙本傍注曰𠂉一八守一歟鐵翁和尚相傳也
⑭〔如是凡～一相傳〕十五文字―甲
⑮海鈔＝抄甲
⑯義＝藏乙丙
⑰深＝源甲

道者。超先代之諸祖。反光九代之謂頗依之。然而高祖之釋義。意趣幽邃。能詮太簡略。受①靈師本習臺宗改跡②入終南一家。於佛祖之本」（六十六裏）

懷。頗有所領。依之比交終南天臺之宗旨。窮同異之兩途。所謂法華佛乘之宗旨一轍故。觀門令投心止觀。戒門引全性而起之說。補終南之文。次本來本③無之靈府雲泥故。戒門引全性而④不可相濫⑤之言。就圓旨簡直取佛意非謂取彼。亦若非究我祖乘須信投心無地嘆之。同異明鏡也。入釋文能々可思之。先哲⑥迷此兩途。或全同臺宗。或偏異彼宗。是以開彼⑦海抄⑥。知同異之兩相。取同成一家之扶仗⑨捨異止一家之相濫。戒光所祕。專依此意趣。今此私抄。亦同彼意趣。思之思之。」（六十七表）

⑩一卷之條々。非普通之說。固可⑪祕外聞。莫說此經高祖之訓說。莫妄宣⑫傳。靈師之誡併在之。⑬海抄云。但此祕要。全爲頓機。全非漸機。三教指歸云。爍々弘陽輝光煽朗然。盲瞽流不見其曜。磯々霹靂⑭震響猛勵然聾耳之族不信彼⑮響。矧大上祕錄。言邈凡耳。天尊隱術。如何妄說。短綆⑯汲水懷⑰井涸。小指測潮。猶謂底極苟非其人。閇談喉內。實非其器。祕櫝泉底。然後見機始開⑱。擇人乃傳。〈云々〉深法誠難逢。一句聞之。勝利偏⑲法界。止觀云常啼東請。善財南求。藥王燒身。善⑳明刎頭。一日三捨恆沙身。尚不能報一句之力。況兩」（六十七裏）

肩荷負百千劫。寧報佛法之恩。〈云々〉

本云㉑

延文作㚑之歲。黃鐘下旬之作㉒。於西郊大覺寺之閑臺㉓記之訖。專爲報

①受＝爰甲乙丙
②跡＋（終）甲丙
③〔本〕－甲、本＋（云）乙
④引全性而＝殘乙丙
⑤濫＝監丙
⑥哲＋（多）甲丙
⑦彼＋（果）乙
⑧抄＋（者）甲、抄＝鈔丙
⑨优＝佐丙
⑩丙本一卷之～法之恩〈云々〉まで一文字下げ表記
⑪可＝果甲
⑫宣＝定甲
⑬之＋（果）乙
⑭靂＝靈甲乙
⑮彼＝其甲
⑯綆＝綆乙
⑰懷丙本傍注曰疑イ
⑱開＝聞乙
⑲偏＝徧丙
⑳善丙本曰普歟
㉑〔本云〕－乙丙
㉒作＝候乙、作＝目丙
㉓臺＝室乙

佛祖之宏恩。且爲勸①一家之初學。忘②七旬之老繭。撰一卷之遺記而已。大覺寺沙門③清算④」

(六十八表)

①勸＝助乙
②忘＝志甲
③〔沙門〕―乙
④十（延寶伍丁巳稔二月中旬涅柈日溟涕寫焉了）甲、十（九十九代後光嚴院即位六年　延文作噩歲當二年丁酉至安永四年乙未四百廿二年也　円宗末弟法忍一校了）丙